

# 言語と言語が会う時

## — 文化共生学へ向けて言語学からの提言 —

栗林 裕

### 1. はじめに

本論では異文化が接触する際に、言語と言語の接触により生じる言語構造の変容についてバルカン半島および周辺地域の言語現象をみながら、その基本現象の概観と方法論上の問題点および新たに確認された現象の報告を行い、文化共生学に対する言語学からの提言を行う。

### 2. 言語の接触とは

言語と言語が接触することによりどのような状況が生じるのであろうか？ また生じうる言語の状況の類型はたてられるのであろうか？ 本節では言語接触の概要を簡単に示してみたい。

言語接触による言語変容の原因として、社会的な要因と言語学的な要因が考えられる。社会的な要因とは接触の度合いの大きさや、不完全な言語習得の有無やそれぞれの言語に対する話者の態度などにより規定される。言語学的な要因とは有標な構造ほど変容が遅れるという普遍的傾向や、言語構造に接触する言語要素が組み入れられる程度や、接触言語間にみられる類型的距離などにより規定される。また言語接触によりどのような構造変化がみられるかはどの程度、言語要素が喪失したり、あるいは付加されたり、または別の要素で置き換えられるかなどという面に依存する(Thomason 2001)。

言語の混合がすすんでゆくとピジンやクレオールといった状態が生じる。ピジンは交易などの目的のため、言語習得の観点からすると不完全な媒介言語が用いられる場合であり、クレオールはこれが母語化したものである。クレオールには学びやすさというものが機能的に重視された結果、地域をこえた普遍性が認められるという。もう一つの言語接触における言語の類型として混成語がある。これはピジンとは違い、言語習得の観点からは完全な二言語使用社会や多言語使用社会に見られるもので、典型的な使用状況とは、社会的あるいは民族的な必要性からグループ内で用いられる秘密語のような機能を果たすものである。この秘密語はピジンのようにコミュニケーションの必要性から要求されるものではない。例えばThomason(2001)はこのような秘密語のことを二言語使用における混成語(bilingual mixed language)と呼んでいる。

言語接触の状況がさらに進んで行き、どちらかに政治的、文化的に優位性が認められると一方の言語がもう一方の言語に取って替わられるような状況もでてくる。これは最終的には言語の滅

亡、つまり死語化に結びついてゆく。死語化を食い止めるためには制度的なサポートというものが不可欠になる。

### 3. バルカン半島に見られる言語接触

言語と言語が接触することにより共通の地域的言語特徴を持つようになる現象がある。言語学者 N. Trubetzkoy が 1928 年に初めて導入した用語で、言語連合 (Sprachbund) とよばれるものである。この古典的な定義によるバルカン半島で生じた言語現象とはギリシャ語、アルバニア語、ルーマニア語、セルボ—クロアチア語、ブルガリア語そして場合によればジプシーのロマ語も含め、系統的な関係に基づかないいくつかの共有の言語特徴を発達させた。具体的には冠詞の後置や不定法の消失といった形態—統語的現象から音韻的現象まで、さまざまなレベルの共有特徴が見受けられる。系統的な関係から共有の言語特徴を引き継ぐということはありえる。しかし上記のバルカン言語圏の言語は系統関係はいずれも印欧語に属するが、親疎の点からは多様な状況で、言語特徴の共有は明らかに言語が隣接することにより、相互影響の結果、保持することに至ったと考えられている。

ところで言語と言語が接触する場合、必ず上記のような共有特徴が生まれる訳ではなく、前節で述べたように、いずれかの言語の政治的、文化的あるいは戦略的な優位性から片方がもう一方に取って替わられて片方が消滅したり、ピジンからクレオールへの移行のように言語と言語が接触することにより媒介言語が成立し、そこから新たな言語が成立することもあり得る。また言語接触により影響をうける言語の文法的領域もさまざまである。一般的になじみがあるのは借用という形で語彙の取込みによるものである。しかし接触による言語変化は語彙的な面だけでなく音韻、形態、統語といった文法的全領域に及ぶ。

本論で議論する現象は上記の言語連合に関わる形態—統語的な文法現象に焦点をしぼり、言語接触により誘発された言語変化について、特にチュルク諸語南西グループを例にして考察していくことにする。

### 4. チュルク諸語の研究状況

近年、言語接触の観点からのフィールドワークに基づく理論的研究が盛んに行われるようになった。代表的なものは 1997 年に始まったドイツのマインツ大学のグループによる北アフリカと西アジアの歴史地域における文化と言語接触の学際的研究であろう (Özsoy ve Taylan 2000)。このプロジェクトからは Johanson (1992) のコードコピー理論に基づきながらチュルク系諸言語の記述と分析の成果が公刊されている (cf. Bulut 2000, Kiral 2000, Menz 2000)。日本では庄垣内および林による研究グループが文部科学省科学研究費による学術調査を 1996 年から現在に至るまで継続している (cf. Shogaito and Fujishiro (eds.) 1999, 林 2002)。チュルク語の言語接触にみ

られるユニークな現象として知られているものに小アジアのギリシャ語とトルコ語の混成言語を挙げる事が出来る。これは20世紀初頭に小アジアに居住していたギリシャ人が話していたとされるもので、語彙はギリシャ語であるが文法がトルコ語の膠着的な形態法を用いるユニークな言語である。

- (1) a. kiát íra perí 'the boy whom I saw' 小アジアのギリシャ語  
REL saw-I boy
- b. tò pe δ ì pû to Í δ a ギリシャ語  
the boy REL it saw-I  
NEUT NEUT
- c. gör-düg-üm oğlan トルコ語  
see-GER-1SG boy

Thomason and Kaufman (1988)

上例の小アジアのギリシャ語では単語はギリシャ語であるのに統語法は修飾語 — 被修飾語のトルコ語の語順に変容している。なお、現在の小アジアでは当時住んでいたギリシャ人は20世紀初頭のローザンヌ条約による住民交換でギリシャに移住し、混成語の話者は残っていないとのことである(小アジア Ferteke 出身の研究者 Fehmi Dinçer 氏による個人談話)。また小アジアにはギリシャ人がギリシャ文字で書き写したトルコ語資料(カラマン語)が数多く残されているが、混成語になった例はほとんど見受けられないようである(cf. Güngör 1998)。従って小アジアのギリシャ語と呼ばれる混成語は非常に限られた地域の口語として、短期間で消滅してしまったと推測できる。

また近年では中国新疆ウイグル自治区で秘密語として用いられているエイヌ語の音韻と形態についての報告もある(Hayasi, Rozi, Mühämmät and Jianxin 1999)。エイヌ語ではウイグル語の統語法をベースにしてペルシア語の語彙を用い、エイヌという少数民族の内部社会においてのみ通用する秘密語として用いられる(庄垣内 2002)。これらは前述した二言語使用社会における混成語の例として見る事ができる。

もともと連体修飾構造において被修飾語 — 修飾語というペルシア語系の統語法が支配的であったが、ウズベキスタンのブハラ地区で話されているブハラ — タジク語において特に若年層の間でチュルク系のウズベク語の影響により修飾語 — 被修飾語の統語法への変容を報告した Ido (2002) も興味深い。

## 5. 方法論上の問題点

実際の現地調査を行なうと、机上の文献資料のみによる精査からは浮かび上がってこないようなさまざまな問題点に直面する。ここでは主に方法論上の問題点をいくつか指摘したい。たとえば言語接触がある複数の言語間で語順の比較を行うという状況を考えてみる。このためには比較の基準を設定することが必要になる。ここではガガウズ語を例にして以下の4項目について考えてみたい。

- 文体差 例文採集か民話採集か
- 地域差 ブルガリアかモルドバか
- 年代差 老年層か若年層か
- 語順を支配する媒介変数の設定

まず最初に文体差による区別の必要性について考えてみたい。ガガウズ語はチュルク諸語のオグズグループに属する言語で、おもにモルドバ南部、ブルガリア北東部、ウクライナ南西部に分布しトルコ語に系統的に近い関係を持つ。しかし他のチュルク系の言語の多数がイスラム教徒であるのに対し、ガガウズ語の話者はキリスト教徒であり、近年（1957年）まで独自の文字を持たなかった。長い間、口語の状態が続いてきたのである。そのような理由もあり、他の周辺トルコ系言語にはみられないような統語的特徴を持つに至った。それは周辺のオグズグループの諸言語より、より著しいSVO語順の言語特徴を持つようになったという点である。これはスラブ系諸言語との言語接触によると従来考えられてきた。たとえば次の例はモダリティを示す補助動詞である *ol-*（～にちがいない）が文頭に位置し典型的なVO語順のパターンをとる興味深い例文のひとつである。ちなみに小アジアのトルコ語（トルコ共和国のトルコ語）ではSOV語順のパターンが優勢で、モダリティ要素が前置されることはまずないので、この例はガガウズ語がVO語順のパターンをとることを示す好例であると考えられる。

[ガガウズ語 民話資料]

Baboglu (1957)

- (2) [*ol-mali* [o komšulara oyana-maa git-ti]],                      de-er              bobası  
 must be that neighbors play-INF go-PST                      say-AOR              his/her father  
 “his/her father says that s/he must be go to the neighbors to play.”

しかし、筆者が実際に1997年におこなったモルドバ共和国ガガウズ人自治区での用例採集では、ことごとく上例のようなモダリティ補助動詞の出現は否定された。上例の出典である Baboglu (1957) は当時、モルドバ南部のガガウズ人の村を回って老人の民話を聞き民話採集をしたそうである。しかし上例は民話のなかでのみ使われていた統語法である可能性も否定できない。このように文体差を無視して、ガガウズ語には補助動詞前置という文法現象が存在すること

を全面に出すことには慎重でなくてはならない。二番目の地域差についてであるが、同じガガウズ語であってもモルドバのガガウズ語とブルガリアのガガウズ語では地域的な差異が当然認められる。政治的な理由からブルガリアのガガウズ語についてはほとんど調査が進んでいない。もちろんモルドバのガガウズ語でも地域による方言があり、それは音韻や形態構造に著しく認められる。統語法の調査についても、差異が認められるかどうか、また認められる場合は地域差とどう関わるかを明らかにせねばならない。年代差についてはモルドバのガガウズ語はガガウズ語教育に対して行政からのサポートがあるので、若年層にもガガウズ語を保持しているものが認められるが、ブルガリアでは言語の保持が全く行政の面から顧みられることはなかったので若年層に言語が引き継がれていない。筆者の2000年のブルガリアでの現地調査によると、ブルガリアのガガウズ語は老年層のみがかろうじて使える程度で、中年層もごく簡単な会話しか理解できず、もっぱらブルガリア語を使用するのが実態である。ブルガリアのガガウズ語はまさしく絶滅の危機に瀕しているといえよう。モルドバの若年層のガガウズ語はトルコ共和国からのトルコ語の影響をメディアや教育を通して受けており、老年層の用いるガガウズ語からの変容が認められる。この点に関してはさらに調査が必要である。最後の変数の設定とは理論的な問題と結びつく。ある言語がOV語順をもつか、VO語順をもつかは修飾語と被修飾語の語順、本動詞と助動詞の語順、関係節の修飾関係などと相関することが指摘されている (Greenberg 1963)。語順を考える際に従来の変数の設定でよいのかどうか、たとえばチュルク語に特有の変数設定の可能性はないのか慎重に考えていくべきである (cf. Csató 2000)。OV語順からVO語順への変容を客観的に説明する際の基準の確立のための方法論も必要であろう。トルコ共和国のトルコ語は一般的にはOV型といわれているが実際には特に口語において様々な要素が述語より後置される例が頻繁に見られる。トルコ語と比較する上でも、どの程度VO型かどの程度OV型かという視点が必要にならう。また言語接触においてはどのような要因が共通の地域的特徴として認めることができるのか、あるいはその地域的特徴の分布は従来指摘されているものと同じで良いのか、拡張の可能性はないのかという点にも留意すべきである。次節では先に述べたバルカン言語連合の概念はさらにチュルク系言語を含んだ言語圏まで拡張可能であることを具体的な資料を提供することで示してゆく。

## 6. チュルク語の不定法の消失

バルカン言語連合にみられる一特徴として不定法の消失がある。英語の例により簡単にたとえると *s/he wants to go* のような表現で *to* 不定詞が消失し *s/he wants goes* のような形になり従属動詞が活用するようになる現象である。従来、この言語特徴が見られるグループにトルコ語は入れられてこなかった。Thomason (2001) は南西ヨーロッパのトルコ語もバルカン言語連合の特徴を共有するが詳細は不明であると記述している。なお小アジアのトルコ語はこのグループに入らないとする。

## 6-1. ガガウズ語

Pokrovskaya (1972) で初めてガガウズ語とバルカン言語連合の関係が指摘された。不定法の消失はバルカン地域のおもに印欧語に特有の現象ではなく、ブルガリアのガガウズ語にも見られると論じられている。

- (3) iste-er-im          gid-eyim,      iste-er-sin          gid-äsin  
 want-PROG-1SG    go-OPT.1SG    want-PROG-2SG    go-OPT.2SG  
 ‘I want to go’                  ‘you want to go’          (Pokrovskaya 1972)

- (4) iste-yor-lar          čöju-un      ismi-ni      koy-sun-nar.      [ブルガリアのガガウズ語]  
 want-PROG-PL    child-GEN    name-ACC    put-OPT-3PL  
 ‘They want to put children’s name.’          (Zajaczkowski 1966)

- (5) ben gitmek          iste-di-m.    [トルコ語]  
 I      go-INF      want-PST-1SG  
 ‘I wanted to go.’

上例(3)において不定法の消失はトルコ語の例文(5)と対比するとよく理解できる。トルコ語にみられるように述語“望む”は不定詞の補文動詞を通常要求するが、(3)では補文動詞も主文動詞と同様の人称接尾辞をとり、活用している。つまりトルコ語を基準におくと不定法が消失したことになり、これはバルカン言語連合に共有される現象と合致する。(4)は1966年のZajaczkowskiによる民話資料集に見受けられたものである。同様の例はモルドバのガガウズ語文献資料や例文採集からも広く確認されている。

## 6-2. バルカン — トルコ語

次の例はブルガリアのイスラム教徒のトルコ語であるバルカン — トルコ語の用例採集から得たものである。ブルガリアには少数のガガウズ人の他に最大の少数民族であるトルコ語話者が約82万人(1994年)在住しており、これは全人口の約十分の一になる。彼らは小アジアのトルコ語とは異なる方言の話者である。興味深いことに統語法ではバルカン諸語に特有の不定法の消失とみられる現象がこの方言にも認められた。

- (6) lazım gid-eyim  
 need go-OPT.1SG  
  
 cf. ben gitmek lazım    [トルコ語]  
 I      go-INF need

‘I need to go’

トルコ語では必要をしめすモダリティ形式は原則として不定詞補文を要求する。しかしブルガリアの北東部デリ — オルマン地区 Veselets 村での用例採集では(6)のような活用した補語をとることが分かった。この方言ではモダリティを表す形式は述語に前置され、よりVO的特徴をとるようになっていることが分かる。しかし通常の場合の統語法では述語に後置される要素が認められるものの、ガガウズ語ほどの語順の変容は見られない。なおブルガリアのバルナ近郊の Kantardcievo 村のガガウズ語ではこれと同様の統語法の用例がみられた。

- (7) ben pazar-a      laazım      yarn      gid-eyim.  
I market-DAT    need      tomorrow    go-OPT.1SG

cf. ben yarn pazara gitmek lazım.

[トルコ語]

“I need to go to the market tomorrow.”

以上のようにブルガリアのトルコ語とガガウズ語は同じような不定詞補文の統語法を共有しており、これはバルカン言語圏の不定法の消失と同じものと捉えることができる。

### 6-3. アゼルバイジャン語

バルカン地域よりさらに黒海をこえて南東方面に眼をむけると、アゼルバイジャン共和国がカスピ海に面してある。アゼルバイジャン語はチュルク語オグズグループに属し、イラン — イスラム共和国とアゼルバイジャン共和国に多数の話者を持つトルコ語に系統的に最も近い言語である。この言語の民話資料を検討してみると、不定法の消失とみられる統語法がごく普通に現れる。

- (8) İstā-di      quş-u      tut-sun      (Az. NAĞILLARI 2001:25)  
want-PST bird-ACC catch-OPT.3SG

‘s/he wanted to catch the bird.’

cf. a. kuş-u      tut-mak      iste-di.

[トルコ語]

bird-ACC catch-INF want-PST

“s/he wanted to catch the bird.”

b. kuş-u      tut-ma-sı-nı      iste-di.

bird-ACC catch-VN-3SG.POSS-ACC want-PST

“he/she wanted her/him to catch the bird.”

次の例は同一テキストの同一ページにおいて統語的対比が見られる例である。(9)では主動詞が先行し補文動詞で不定法の消失が生じており、(10)では補文動詞が主動詞に先行しており、トルコ語の統語法と変わりがないと同時にトルコ語のような不定詞構文を用いている。

- (9) istä-di-m            al-may-am,            kişi            äl çek-me-di.  
 want-PAST-1SG   take-NEG-1SG   person take go out-NEG-PAST  
 'I wanted not to take, and the person did not take.'

- (10) Onu görüb geri qayıt-maq istädım.  
 it-ACC    see-GER    return-INF want-PAST-1SG  
 'seeing it, I wanted to return.'  
 (Az. NAĞILLARI 2001:170)

以上のアゼルバイジャン語の例からは補助動詞と主動詞の位置関係が不定法の消失と関連しているようである。つまりOV語順からVO語順に変容するにつれ、不定法の消失が生じているようである。アゼルバイジャン語に両方の構造が認められることはこの言語が語順の観点からOV語順からVO語順への移行のちょうど中間的な様相を呈しているからであるといえよう。

#### 6-4. イラク — トルクメン語

イラクで話されているトルコ系少数民族のイラク — トルクメン語のデーターのなかに不定法の消失とみられる例を見つけることができるBulut (2000)。次の例では主動詞”望む”の補文動詞”食べる”は不定形ではなく、活用形で出現している。Bulutはこの点についてペルシア語からの影響であるという。

- (11) ist<sup>1</sup>r<sup>i</sup>            yê<sup>s</sup>n            ö:z<sup>1</sup>nü.  
 want:PRS 3SG    eat:IMP 3SG    RFL:ACC  
 'he wants to eat her.'

#### 6-5. トルコ語

また類例は現代トルコ語の口語にも見られる。次の例では口語に限られるものであるが、不定法の消失とでもいべきものがみられる。従って本節冒頭で述べたThomason (2001)の小アジアのトルコ語についての記述は厳密な意味では誤りである。特に(12b)ではVO語順をとる例で、アゼルバイジャン語のテキストには一般的に良く見られるものである。



トルコ語口語 Menz (2000:153)

(12) a. Git-sin iste-di-m.

go-OPT want-PST-1SG

'I wanted him/her to go.'

cf. git-mek iste-di

go-INF want-PST

's/he wanted to go'

b. Ben iste-mi-yor-um köy okul-u-na git-sin.

I want-NEG-PROG-1SG village school-3SG.POSS-DAT go-OPT.3SG

cf. köy okuluna git-me-si-n-i iste-mi-yor-um.

village school-DAT go-VN-3SG.POSS-ACC want-NEG-PROG-1SG

'I don't want him/her to go to a village school.'

## 7. 結論

以上より不定法の消失はバルカン地域に限った現象ではないことがわかる。モルドバやブルガリアのガガウズ語を含め、バルカン地域のトルコ語方言であるバルカン — トルコ語にも不定法の消失はみられ、口語ではあるがトルコ共和国で使用される小アジアのトルコ語にもこれを認めることができる。さらにはイラク — トルクメン語やアゼルバイジャン語にも不定法の消失がみられる。アゼルバイジャン語はペルシア語からの大きな影響を受けた言語であり、この点はイラク — トルクメン語と共通する点である。このような不定法の消失がトルコ系諸言語にみられるようになった理由を求めるのは容易なことではない。しかし少なくとも従来のバルカン言語圏の概念を拡張し、黒海からカスピ海周辺部を含め、さらにはイラクなど中東地域も入れて考える必要があることを示唆しているといえよう。

また不定法の消失は語順の変容と相関している可能性がある。ガガウズ語はかなり口語の形をとどめた言語である。ガガウズ語がOV語順からVO語順へ変容したことは周知の事実であるが、ガガウズ語が長い間、正書法をもたず、口語の状態が存続してきた事実と語順の変容の相関を見逃してはならない。トルコ語も不定法の消失は口語という限られた形にのみ見られる。逆にアゼルバイジャン語ではテキスト資料にも豊富に不定法の消失が見られる。アゼルバイジャン語はペルシア語との言語接触により統語法の面でかなりの影響を受けたためトルコ語よりもかなり自由な語順を許す。これらの事実からOV語順からVO語順への変容が不定法の消失と関連しているように見受けられる。バルカン地域では口語での使用が高まりOV語順からVO語順への変容が

生じた。アゼルバイジャン語やイラク—トルクメン語ではペルシア語からの影響で語順の変容が生じ、不定法の消失が浸透したといえるだろう。

このような不定法の消失が異なった動機づけにより偶然生じたのか、それともバルカンの地域の特徴の拡張として捉えられるのかは、バルカン言語圏にみられる音韻的、形態の特徴とあわせて考えてみる必要がある。しかし、少なくとも従来の見解とは異なり不定法の消失はバルカン言語圏に限った現象ではないと結論付けることができるであろう。

言語接触を巡る諸問題は言語が文化を担う基礎になっていることを考えると文化の共生を考える上で、重要なヒントを提供することになる。たとえば多言語保持を実行するためにはどうすれば良いかを考える際、言語と言語が接触する際に生じる現象を記述し、理論化し、起こりうる予測をたてる必要性もでてくるであろう。このように文化の共生という目標に向けて言語学から重要な視点を提供することができる。

— 略記号 —

ACC: 対格 AOR:アオリスト DAT: 与格 GEN: 属格 GER: 動名詞 INF: 不定形 NEG: 否定  
 NEUT: 中性 OPT: 希求形 PL: 複数 POSS: 所有形 PROG: 進行形 PRS: 現在形 PST: 過去形  
 REL: 関係詞 REF: 再帰形 VN: 動名詞 1SG: 一人称単数 2SG: 二人称単数 3PL: 三人称複数

[付記] 本研究は平成12-14年度 科学研究費補助金（基盤C一般1）研究課題「バルカン—トルコ語における統語法についての総合的研究」課題番号：12610557（研究者代表 岡山大学栗林 裕）による成果の一部である。

参考文献

- Bulut, C. (2000). Clause linkage in Iraqi Turkmen. In Göksel, A & C, Kerslake (eds.). *Studies on Turkish and Turkic Languages*. Wiesbaden: Harrassowitz, pp.161-pp.170
- Bulgar, S. (1990). *Dev Adamın Oolu*. Kişinev: literatura Artistik.
- Csató, E, A. (2000). A syntactic asymmetry in Turkish. In Göksel, A & C, Kerslake (eds.). *Studies on Turkish and Türkic Languages*. Wiesbaden: Harrassowitz, pp.417-pp.422
- Eckmann, J. 1950. Razgrad Türk ağzı. *Türk Dili ve Tarihi Hakkında Araştırmalar I*, pp.1-pp.25.
- Greenberg, J. (1963). Some universals of grammar with particular reference to the order of meaningful elements. In J. Greenberg, ed., *Universals of Language*. Cambridge, MA.: MIT press, pp.73-pp.133.
- Güngör, H. (1998). *Türk Bodun bilimi Araştırmaları*. Kayseri: Kılıncım Press.
- Güngör, H and Argunşah M. (1991). *Gagauz Türkleri*. Ankara: Kültür Bakanlığı Yayınları. = Baboglu (1957)
- 林 徹(編) (2002) 『ユーラシア周辺部チュルク系諸言語の調査研究 課題番号：国11691009』平成11年度～平成13年度 科学研究費補助金（基盤研究(A)(2)）研究成果報告書 東京大学

- Hayasi, T., Rozi, S., Mühämmät, M., and Jianxin, W. (1999). *A Šäyxil vocaburary: A preliminary report of linguistic research in Šäyxil village, southwestern Xinjiang*. Kyoto: Kyoto University.
- Ido, S. (2002). Şimdiki Buharalı Tacikçesinin sözdizimsel ve şekilbilgisel özellikleri: niteleyici tümcecigi, edilgen çatı, ve süreklilik görünüşü. *İlmî Araştırmalar 13*, Istanbul: Istanbul University, pp.51-pp.56
- Johanson, L (1992). *Strukturelle Faktoren in Türkischen Sprachkontakten*. Sitzungsberichte der Wissenschaftlichen Gesellschaft an der J. W. Goethe-Universität Frankfurt am Main 29:5, Stuttgart: Steiner
- Johanson, L & E, A, Csato (eds.). 1999. *The Turkic Languages*. Routledge.
- Kuribayashi, Y. (2000). Dative marking in Gagauz. In Göksel, A & C, Kerslake (eds.). *Studies on Turkish and Turkic Languages*. Wiesbaden: Harrassowitz, pp.229-pp.240.
- Kıral, F. (2000). Relative constructions in Khalaj. In Göksel, A & C, Kerslake (eds.). *Studies on Turkish and Turkic Languages*. Wiesbaden: Harrassowitz, pp.181-pp.188.
- Menz, A. (2000). Analytic modal constructions in Gagauz. In Göksel, A & C, Kerslake (eds.). *Studies on Turkish and Turkic Languages*. Wiesbaden: Harrassowitz, pp.151-pp.160.
- Azərbaycan Nağilləri 1 jild.* (2001). "Maqnat" MMM nəşniyyatı, BAKI.
- Özsoy, S ve E,Taylan (hz.). (2000) *Türkçe'nin Ağızları*. İstanbul: Boğaziçi Üniversitesi Yayınevi.
- Pokrovskaya, L. (1972). Gagauz dilinin ve balkan Türk ağızlarının bazı sentaks özellikler. In *Bilimsel Bildiriler 1972*. Ankara: TDK yayınları, pp.231-pp.235.
- 庄垣内正弘 (2002) 「チュルク語の言語接触について」林 徹 (編) 所収 (2002) 『ユーラシア周辺部チュルク系諸言語の調査研究 課題番号：国11691009』平成11年度～平成13年度 科学研究費補助金 (基盤研究(A)(2)研究成果報告書 東京大学 pp.19-pp.52
- Shogaito, M & S, Fujishiro (eds.). 1999. *Issues in Turkic Languages Vol.1*. Department of Linguistics; Kyoto University.
- Thomason, G. (2001). *Language Contact: An Introduction*. Edinburgh University Press.
- Thomason, G and T, Kaufman. (1988). *Language Contact, Creolization, and Genetic Linguistics*. Berkeley: University of California Press.
- Zajaczkowski, W. (1966) *Jezyk i folklor Gagauzów z Bułgarii*, Kraków.